

－ ヨコハマの子ども・若者の成長を応援する人たちへ －

青少年育成活動・支援活動 研究報告・事例集

YOKOHAMA EYE'S 2011

－ ヨコハマ アイズ －

公益財団法人 よこはまユース

“EYES”は、

Every Youth, Extensive Support(すべての青少年に幅広い支援を!)を略し、

青少年を見守り、育てる複数の目、育つ芽、そして愛をイメージしています。

「青少年を温かく見守り、応援しよう」という思いがひろがっていきますように…。

はじめに

今年度の年報「YOKOHAMA EYE'S」は、震災から一年を迎える機を捉えて "震災特集" を組むことといたしました。

平成23年3月11日に発生した東日本大震災は、被災地というまでもなく、首都圏においても交通・通信網などに大きな混乱が生じました。その非常の状況下において子どもの居場所はどのような機能を果たし、また果たせなかったのか。児童を預かる子どもの居場所のおかれた状況や子どもたちの安全確保、保護者との連絡で課題となるものは何だったのか。

年報「YOKOHAMA EYE'S」では、特集の中で、こうした当法人の管理施設での被災時対応の事例を挙げながら現場の状況や対応がどのように行なわれたのか報告し、将来の災害対応の改善につなげるとともに、子どもの育成や支援に関わるすべての方々との問題意識の共有を図ることをねらいとしています。

また、管理施設の事例だけでなく、震災が青少年や活動団体・地域に与えた影響にも触れ、被災地復興にボランティアとして関わっている青少年からの寄稿、そして、震災が青少年の居場所にどのような影響をもたらしたのかについて研究者から寄稿をいただくことで、震災の影響の輪郭を浮かび上がらせることを試みました。試みに対する忌憚のない御意見をいただければ幸いです。

現場あるいは関係者からの赤裸々な報告や問題提起は、きっと子どもたちの安全にとどまらず、被災時の行動を考える上でも皆様にとって大きな参考となるものと信じております。

最後になりましたが、被災地の復興が一日でも早く遂げられることをお祈り申し上げるとともに、本誌の発行に際し、ご協力いただきました執筆者や関係者の皆様に感謝申し上げます。

今後とも当法人活動へのご支援、ご指導をいただきますようお願い申し上げます。

平成24年3月

公益財団法人 よこはまユース

代表理事 三 田 修

YOKOHAMA EYE'S 2011

目 次

テーマ『震災と居場所～子どもの安全に対する取り組みについて～』

特集1. 放課後キッズクラブでの被災時対応について

震災時対応の報告

本町小学校放課後キッズクラブ 蓮尾 美代子 …………… 2

東日本大震災発生時の状況報告と課題

瀬ヶ崎小学校放課後キッズクラブ 船越 瞳 …………… 5

放課後キッズクラブでの被災児対応について

日吉南小学校放課後キッズクラブ 福富 由紀子 …………… 8

関連資料 『東日本大震災における対応アンケート』集計結果 ……………10

横浜市こども青少年局放課後児童育成課作成資料から抜粋

特集2. 被災者受入施設の状況と課題

野島青少年研修センターの東日本大震災に伴う被災者の受入と対応

横浜市野島青少年研修センター センター長 伊藤 豊 ……………18

特集3. 公開シンポジウム『震災と子ども・若者のこれから』報告

公開シンポジウム『震災と子ども・若者のこれから』実施報告

横浜市青少年育成センター 七澤 淳子 ……………22

特集4. 被災地でのボランティア活動から感じた青少年の報告

3.11から学ぶ事とこれから

神奈川大学法学部自治行政学科4年 杉野谷 和孝 ……………28

特集総括. 震災時対応に関する学識者からの寄稿

子ども・若者の支援と大人の課題

神奈川大学講師 久田 邦明 ……………32

法人事業報告・紹介記事

人材養成研修「青少年にかかわる大人の役割」

横浜市青少年育成センター 七澤 淳子 ……………38

子どもたちの身近な場所で満天の星空を！～出張プラネタリウム事業～

公益財団法人よこはまユース事業課 雨森 勇一 ……………44

※所属はすべて平成24年3月1日現在のものです

特集 1.

放課後キッズクラブでの

被災時対応について

◆ 震災時対応の報告

本町小学校放課後キッズクラブ 蓮尾 美代子

◆ 東日本大震災発生時の状況報告と課題

瀬ヶ崎小学校放課後キッズクラブ 船越 瞳

◆ 放課後キッズクラブでの被災児対応について

日吉南小学校放課後キッズクラブ 福富 由紀子

関連資料 『東日本大震災における対応アンケート』集計結果

横浜市こども青少年局放課後児童育成課作成資料から抜粋

震災時対応の報告

本町小学校放課後キッズクラブ 蓮尾 美代子

発生時：主任と補助スタッフ4人、計5人の体制

1年生のみ下校、2年生以上は授業中だった。

1年生もまだ教室に残っている子もあり、早く下校した子は、ピロティで方面別に集まっていた。

その時キッズに参加していた児童は19人。

大きな揺れだったが、静かな揺れ方だったため、子どもたちは恐怖より驚きが大きかった。

主任以下、スタッフは子どもたちを部屋の中央に集め、声掛けをしながら揺れが収まるのを待った。

蓮尾は、部屋のドアを開け廊下と昇降口を確認し、まだロッカー付近にいる子や、靴を履きかえている子を、キッズ内に誘導した。

揺れが収まった後、“全員校庭に避難”のアナウンスがあったため、キッズもピロティに集合した。

下校のため方面別に集合していた1年生も、そのままクラスごとに校庭に集合となった。

緊急時のマニュアルに従って、スタッフは参加カードと参加予定表を持って集合。校庭で子どもの確認をしたところ、1人の所在が不明。自分のクラスにいるのを見つけ、キッズの集団に戻した。

学校は集団下校となり、その日キッズに参加予定の児童はキッズ預かりとなった。2年生以上は荷物を全部置いての下校なので、キッズ参加カードもなく、本人の“キッズ参加”の申告のみで受け入れた。

お迎えに駆けつけた保護者が、それぞれの集団の中からわが子を見つけて連れ帰っている。キッズも2人を保護者に引き渡したが、それ以前に連れ帰った例も複数あると思われる。キッズで預かった児童は43人となった。

いつでも避難できるように、常は履かせない上履きを履かせ、暖房は切ったので上着を着用させた。

蓮尾はキッズの緊急一斉メールで、キッズ留め置き、保護者お迎えを送信した。

経過：～5時

保護者からの電話やメールが、途絶えがちに入ってくる。

新宿で動けない・浜松町で渋滞・赤坂から帰れない、キッズは何時まで預かってくれるかと、保護者の必死な思いがひしひしと伝わってくる。大丈夫ですよ、キッズはお迎えがあるまで預かります、と繰り返した。

次々とお迎えがあり帰った。両親の間で連絡が取れないための行き違いもあったが、誰に引き渡したか説明ができたので、不安は最小限に留められたと思う。保護者と連絡が全く取れない子が1人。

翌朝の食事に備えて、スタッフに牛乳を買いに行ってもらった。コンビニは大渋滞で品物がなくなっていると知った。

津波警報で避難してきた人がいて、学校は急ぎ体育館を開放した。こどものトイレにはスタッフが同行した。

5時半頃

残っている子は15人。全員におやつを出した。

住居が2～3駅程度で、徒歩で帰れるスタッフ2人を帰した。

翌日のプログラムはすべて中止とし、参加者と講師へメールを送信した。

停電にならなかったのでパソコンは使用できたが、情報収集はラジカセを利用した。

6 時ころ

帰宅不能者が、体育館を利用し始めた。キッズのドアを施錠。

7 時半

残っている子は8人。知り合いが引き取りに来ることになった1人を除いて、子どもとスタッフにパスタの夕食を提供。

9 時

残っている子は6人。保護者は足止めで動けず、また夫婦間での連絡も取れていない。

まったく連絡が取れない子は1人。プログラム講師とようやく連絡が取れた。10時すぎまでにお迎えは3人。

11時

連絡が取れなかった母親が到着。上野からヒッチハイクと徒歩、途中で自転車を買って走らせて来た。

部屋に入るなり、座り込んで涙。まず熱いお茶を飲んでもらった。子どもはといえば、キッズではめったに見られないDVD鑑賞中とあって、終わるまで帰らないと言いだす。

残った2人は、畳に布団や座布団を敷いて寝かせた。寒いのであったけの毛布と、スタッフのコートなどをかけた。

1 時

近くに住んでいるスタッフが帰った。蓮尾と他1人が残った。

川崎まで車、それ以後は徒歩で到着した両親がお迎え。起こして1人が帰宅。1人は熟睡。

7 時

3人で冷凍庫にあったパンとハムと牛乳の朝食。保護者に連絡するも応答がない。

8 時半

お迎え。明け方帰って一休みしていましたが、さわやかな笑顔。お弁当はいかほど？と聞かれて、力が抜けた。いいのよ、今度ごちそうしてねと言うと、うーん高くつきそうとのことのお返事。

9 時

今日もキッズへ行きたいと言っているが、との問い合わせあり。事情を説明し、代わりのスタッフの手配ができていないとお断りをした。

考察

- 参加カード・参加予定表との確認は必須。
- 停電がなかったのに、途絶えがちなながらも保護者と連絡が取れた。キッズからの一斉メールも届かなかった例も多かったのに、保護者には連絡がなくてもお迎えが必要なことをアピールしなければならない。
- 知り合いのキッズ参加予定者を、連れ帰る例もあったが、幸い担任から連絡があり、確認できた。急ぎ保護者に、その旨を連絡した。
- キッズにお迎えに来た保護者が、近所の子も一緒に連れて帰ろうとする。それぞれ迎えにこちらに向かっているはずであり、常と異なり連絡も取りにくくなっているため、お断りをした。この例は多数あった。また、頼まれて引き取りに来た代理人は、余震が続く中、わが子を自宅に置いて駆けつけてくるので必死である。今回はこの例が2件あった。
- 現在学校で実施している引き取り代理人登録制は、善意の引き取りを整理する効果があると思われる。
- しかし混乱の中、代理人の確認は難しいのではないか。保護者間で連絡が取れない中での行き違いも多くなると思われる。東北の被災地での実態はどうだったのだろうか。
- 両親間で連絡が取れないまま、一方からの連絡で代理人に引き渡しをした場合もあったので、誰に引き渡したかを把握するのが大切である。引き取りをした場合の確認表を準備しておくとうい。
- 電話では、いつもよりゆっくりと、声のトーンを落として話すようにした。

- キッズはテレビがないので、情報収集のためのラジカセは必須。
- 停電に備えて照明の他、単機能の電話機を備えておくといよい。
- 体育館が避難所となるので、トイレ利用に不安があった。また毛布を借りればよかった。
- 食料の備蓄が必要である。
- 丁度花粉症の時期であったが、薬の予備を持っていなかったため、苦しかった。スタッフは常備薬を保管しておいた方がよい。
- 歯ブラシ・タオル・予備の着替えなどの保管も必要。

その後のキッズの対応

- 緊急時のマニュアルの見直し。
- 避難に備えて、スタッフ非常持ち出しのリュックを3個準備。
- 単機能の電話を保管。
- 予備電池・卓上コンロとカセットガス・懐中電灯の他、卓上に置くことのできる照明具の準備。
- 引き取り者のリストを作成し、揺れで飛ばされないよう壁に取り付けた。
24年度からは、保護者に引き渡しカードを提出してもらいファイルを準備することとした。
- 緊急時のキッズ対応表を作り直し、保護者に配布。
- 子どもたちへ高台への避難訓練の実施。間に合わない場合は、すぐ裏手のホテルに逃げるよう、スタッフに指示。(ホテル側との相談はなし。高層のマンションはあるがロックがされているため入れない)。
- 歯ブラシ・タオルの備蓄。
- 非常食と水を補充。
- 消防署と避難路の相談をしたが、有効な方法は見つけられなかった。



日常のキッズクラブ。子どもの安全確保は毎日の課題である。

東日本大震災発生時の状況報告と課題

瀬ヶ崎小学校放課後キッズクラブ 船越 瞳

【瀬ヶ崎小学校放課後キッズクラブ（以下、「キッズクラブ」）概要】

- キッズクラブの教室は、1階校舎入口のすぐ横に在り。（第2活動室は2階の図書室。日常的には使用せず。）
 - 開設日時は、月～土曜日、平日は放課後～19:00、土曜日は8:30～19:00
 - 参加人数は、平日平均40.3人
 - 人員配置は、通常は横浜市規定の配置人数の4人（常勤職員が1名ないし2名と補助指導員）、状況により1～2名の増員
 - 地震のあった金曜日の下校時刻は、
 - 1・2年生は5時間目まで 14:30終了
 - 3・4・5・6年生は6時間目まで 15:15終了
 - キッズクラブの緊急時の対応
 - ・瀬ヶ崎小学校には、原則、災害時の集団下校はない。災害発生時には、学校で留置き、保護者の迎えを待つ。
 - ・キッズクラブでは、学校の対応に準じ、キッズクラブで留置き、迎えを待つ。つまり、緊急時・災害時には「その場で留置き、保護者の迎えを待つ」ことになっている。通信網の混乱を考慮し、キッズクラブからの連絡はしない。
- 以上の内容を、赤A4判の用紙で、「保存版」として登録時に配布している。

【2011年3月11日（金）の報告】

14:30 キッズクラブ 定例スタッフミーティング終了

ほとんどのスタッフは解散。当日勤務のスタッフと、用事があって残っている人がいました。

14:45 当日の開設準備完了 下校児童を待つ

午後の授業が長い金曜日、あと5分もすれば

こどもたちが帰ってくるという時間です。

14:46 地震発生

キッズクラブには、主任指導員、指導員、補助指導員4人、合わせて6人がいました。

予知放送は無く、ゆっくりとした横揺れが始まるのとほぼ同時に停電になりました。

物が落ちたり、歩けないほど揺れたりはしませんでした。震度3ぐらいでは、揺れを感じない教室が揺れていました。

「まさか」との戸惑いが強く、「頭、ももって」の指示にスタッフの動きはついていきません。

「校庭にでます！」思わず、声がきつくなりました。

参加者確認名簿とヘルメットの入った袋を持って校庭へ出ました。

下駄箱に出ると、階段から、降りてくる途中の児童の声が聞こえました。

下校は始まった直後だったようで、校門の外に出た児童はいなかったとのこと。

下まで降りてきた児童は、靴をはいて一緒に校庭へ出ました。

校庭では、学校の指示で、児童の避難が始まりました。

学年ごとに並んで、点呼を行い、座って余震の収まりを待ちます。

泣き出す人、酔ってしまい体調不良を訴える人、興奮して立ったり座ったりを繰り返す人、みんなそれぞれ、不安そうでした。

全て、学校の指示の下に行われていたため、キッズクラブスタッフはお手伝い程度。

「大丈夫だよ。座って先生のほうを向いてね。」と声をかけながら、児童の後方で待機します。

学校長から、全校に向かって、「地震があった

こと」「校庭への避難が完了したこと」「このまま、校庭避難を続け、次の指示を待つこと」が静かに伝えられました。

情報収集が始まり、当面の校庭待機が決まったので、キッズクラブ主任が学校に出向き、今後の対応を確認しました。

前もって決まっていたとおり、児童だけでの下校は行われないことが、確認されました。

同時に、キッズクラブでの引き取りはせず、全児童を学校に留置き、保護者を待つことも確認されました。

ここで、スタッフを集めてミーティングを行いました。

- ・安全確認が取れるまでは、学校にて、避難に協力する。
- ・スタッフ自身の安全のため、校外に出ない。
- ・人員把握係を配置。離れるときには必ず、居場所を人員把握係に伝える。
- ・校舎内に入るときは、必ず複数で、靴を履いたままはいる。

との取り決めをしました。

その後、係を割り振り、「室内の安全確認」「物品の持ち出し」を行いました。

大きな余震も収まり、校庭では、保護者の引き取りが始まりました。

児童は、学級ごとに集まり、待機をしていました。

3月の初旬、暮れていく時間帯はどんどん寒くなっていきます。

上着を持ち出せなかったり、体育着のままの人もいて、「さむ〜い!」「トイレに行きたい」との声がでるようになりました。

キッズクラブの備品（着替え、毛布、ブルーシート、アルミシート）を防寒用に貸し出しました。また、トイレを使うために校舎に入る許可が学校から出たので、校舎入口で案内をしました。

17:00 校庭避難解除、児童は教職員とともに校舎内へ移動

17:00頃から、雨が降り出しました。

児童と教職員が校舎内へ移動したのと同時に、キッズクラブも室内へ入りました。

17:15 キッズクラブ、常勤指導員2人 学校と合流

補助指導員は解散し、常勤指導員2人は学校の避難教室に合流することにしました。

実は、このとき、学校前の国道16号線と周辺道路は、停電により信号機が停止。一斉に帰宅を始めた車で、大渋滞。鉄道も運転見合わせになっていました。

「物品と人員の提供で、学校に協力をする」という目的以外にも、キッズクラブのスタッフが動けなくなっており、安全の確保をする必要がありました。

学校の公衆電話で、運営法人に連絡をしました。停電をしていること、児童の預かりがないこと、常勤指導員以外は解散したことを報告し、新たな指示がないかを確認しました。

学校では、防災備蓄庫が開き、灯りと暖房、非常食が提供されていました。

職員室で、新たな情報がないかを確認し、キッズクラブで貸し出せる物品を知らせました。

19:30頃、学校長の許可をもらい、キッズクラブの当日のおやつとして準備されていた材料で、サンドイッチを作り、児童に提供しました。

教室には、日ごろ、キッズクラブの夜間利用をしている児童が多くいて、「よかったぁ、キッズのおやつ、今日は食べられないかと思った!」と喜んでもらいました。

21:45 停電解除 ほぼ同時刻、保護者の引き取り、終了

22:15 常勤指導員、キッズルームを片づけて退室

常勤指導員たちは、徒歩での帰宅となりました。

【今回の震災を通してわかったこと】

○備えにやりすぎはない

地震発生時、キッズクラブスタッフの対応は充分とはいえませんでした。

これだけの地震を経験した者は一人もおらず、当然、大きく動揺しました。

実際の災害時には、思うような行動を取れないことを実感しました。

取り決めの確認と訓練の充実をとおして、より確実な行動を取れるようになることが課題です。また、施設の環境整備や物品のメンテナンスも、見直しが必要です。

○キッズクラブには災害に対応できるだけの準備はない

キッズクラブはどこまで児童とスタッフの安全を守れるのでしょうか。

今回は、児童の預かりがない時間帯だったため、不足は最小限でしたが、基本的に、キッズクラブは人員、物品、施設の面で災害に対し、充分とはいえません。

また、「すべての子どもたちを対象に小学校施設を活用して、『遊びの場』と『生活の場』を兼ね備えた、安全で快適な放課後の居場所を提



供する」という役割の下に設定された既存の、人員、物品、施設などの環境から考えると、災害対策を大幅に補強することは現実的ではないでしょう。

災害時は、児童が所属する学校や地域の下、一緒に児童を保護することが最善であると思います。

そのためには、キッズクラブが、家庭・学校・地域の中にあって、きちんと認知されている必要があります。情報の周知を確実に言い、連携を強化したいと考えています。

【今後のために】

今回、キッズクラブは、十分に機能したとはいえませんでした。

当日、スタッフは校内にいましたが、学校の避難行動中、決まった役割を担うわけではありませんでした。

せっかく人手があっても、キッズクラブ自体の周知が足りなかったため、役割がはっきりとせず、活用しづらかったのだと思います。

また、保護者引取下校についても、配布していた用紙ではわかりにくかった、不十分だったとの声がありました。

こちらも、情報の周知が足りなかったことを示しています。

キッズクラブの現状の人員、物品、施設で、どれだけのことができて、どのような対応を用意しているのか、そのために協力を求めたいことは何なのか、また、今後のためにどのようにしていきたいのか、きちんと伝わるように発信し、理解を求め、より確実な安全を確保することが必要だと考えます。

放課後キッズクラブでの被災児対応について

日吉南小学校放課後キッズクラブ 福富 由紀子

3月11日、震災当日休務日だった私は、都内に出かけていて、震災に遭いました。

都心での今まで体験した事のない大きな揺れ、何度か襲う大きな余震に、ちょうど低学年の児童が帰宅する時間帯だったので、すぐにキッズクラブに連絡を入れ児童の状況を確認しました。指導員と一旦は連絡が取れましたが、その後は携帯電話も通じなくなりました。メールでのやり取りもかなりの時差を生じてですが何とか出来ました。ほとんど通じなくなりました。今までにこんな経験もなく、現場の状況が見えてなく、わからないだけに、もどかしい思いでいっぱいでした。当日は指導員が現場の指揮を執ってくれてはいましたが、初めての大きな震災対応にスタッフたちの不安はかなりのものだったと思います。

普段から全面的にキッズクラブに協力して下さる学校でしたので、不安な中でも信頼できるものは大きくありました。指導員にも「学校の職員の指示を仰ぎ協力して児童を守る」ことをお願いをしていましたので、現場の力を信じての時間が流れました。夜9時過ぎに、やっと繋がった指導員からの連絡で、キッズクラブで対応した児童の完全下校と勤務していたスタッフ全員の帰宅報告を受け、安堵したものです。

深夜にやっと動き出した電車に乗りこみ、何とか自宅にたどり着き、早朝小学校に向かいました。学校の建物自体には見た目には大きな被害はありませんでしたが、小さな地盤のくずれや傾き、ゆがみが所々に見られました。そして、まだお迎えに来られていない児童に付き添って前日から残っていた学校職員とお会いし、学校の様子や震災当時の状況をお聞きすることが出来ました。合わせてスタッフたちからも聞

いた地震発生時の状況は、次のようでした。

地震発生時は低学年の下校が始まりかけていた時間だったため、ほとんどの児童が学校に戻って待機し、キッズクラブに参加していた児童は10数人でした。最初、長く続く揺れに児童たちも驚きましたが、学校の校内放送による指示が何度も流れ、参加児童はキッズルームの長机の下に全員がすぐに逃げ込み身を守りました。スタッフたちも内心はかなりの動揺がありましたが、学校からの情報が校内放送で随時流れていたため、かなり助けられたと話していました。

学校の児童とともにまず校庭へ避難しました。小雨のちらつく寒空で、キッズには各自の防災ずきんを用意していないので、コートなど身に着ける物で頭を守りながら、スタッフは毛布を手にもって校庭に出ました。児童が校庭で待機している間に、学校職員の許可を得てキッズルームに名簿を取りに戻りました。3月というのにまだ寒く、コートや毛布・マスクが防寒グッズとして役に立ちました。校庭に暫く待機していた後に防災避難拠点場所として小学校の体育館に避難場所が設置されましたので、体育館に移動し保護者の迎えを待ちました。

体育館が地域の防災避難拠点として設置されたことを受け、一旦帰宅した児童たちや地域の人たちも避難して来ました。学校近隣に居住しているスタッフも自宅から駆けつけて児童の対応にあたってくれました。近隣では停電した地域がありましたが、幸いにも学校は電気が通じたままで体育館は明るく、高学年の児童が顔見知りの近隣の住民の方々の手伝いをし、低学年の児童や小さな子どもたちに地域防災拠点から地域備蓄のパンや飲み物を配っていて、その光景に頼もしさを感じました。

しかし、続く余震にキッズルームのある校舎の安全が確認できないのと、体育館から距離があるためキッズルームに戻る事ができなく、パソコンや電話がなかなか使えませんでした。寒い日で、長時間体育館待機の可能性もありましたので状況が落ち着いている時を見計らって単独行動をとらず、許可を得て数回キッズルームに戻り、食べ物や使える防寒グッズを持ち出しました。結局、携帯電話は繋がらず、指導員のスマートフォンで時間をかけて、まだ待機している児童の保護者へ連絡をとることができました。

学校とともに体育館にいる児童の確認をしましたが、キッズクラブへの参加人数が10数人と少なかったため、児童確認がしやすかったこともあり、学校への児童確認報告は大きな混乱なく行えました。

現在、キッズクラブには参加児童登録数が400人近くあり、参加児童は多い月で1日平均80人を超えています。また兄弟間でもキッズクラブへの登録もまちまちです。非常事態の中でキッズ、学校と児童と分けて本人確認するのは大変な上、引き渡しの煩雑さ・間違いを少なくするためにも、災害時においては、すべての児童を学校に戻して学校から保護者に児童を引き渡します。そしてキッズスタッフは、学校に場所・物資を含めてサポート的立場に立って協力し行動することになっています。

『災害時には児童は学校に戻す』体制になっている日吉南小キッズクラブにとって、安全で正確な引き渡しを行うには、正確な情報が必要となります。そのために、緊急持ち出し防災グッズに参加者名簿一覧表を入れてあり、当日の参加確認がすぐに正しく連絡できるようにしています。学校に守られている日吉南小キッズクラ

ブにとって、休業日の対応を今まで以上に心がけなくてはなりません。震災時に学校が地域の防災拠点となる日吉南小学校では、休業日における児童への対応は地域の方と一緒に助け合っ児童の安全を守ることになります。そのためにも地域の方とともに助け合えるように地域防災訓練にも積極的に参加していますし、幸いにもスタッフには地元の方が多く、地域防災の要員としても中心となって行動して下さり、地域情報も早くしっかりと入ってきて、震災時にも助けて頂きました。

そしてスタッフ全員が、震災時のすべきことを理解して動けるように、キッズルーム内の防災グッズの使い方や非常用持ち出し物の確認を頻繁に行うようにしています。

今回、私自身が地域外にいて、地元の情報の入らないこと、連絡が取れないことのでかなりの不安を覚えました。仕事で離れてしまっている保護者にとっては、身動きが取れない時でも、わが子・家族が無事でいてくれると思えることは安心です。

日吉南小キッズクラブは『地域の中で地域とともに子どもたちを育てる』スローガンの日吉南小学校と意識をともにして活動しています。地域外に勤務されている保護者はもちろん、すべての保護者に地域性をよく理解して頂き、家族以外にも地域に住んでいる方をよく知って頂き、児童とともに災害時の居場所確認をしておくをお願いしています。地域力を生かし、保護者、地域、学校、キッズクラブの四者が協力し、震災時に子どもたちを守っていけるように、その四者の関係をこれからも途切れることなくしっかり繋ぎ続けることを大切にしていきたいと思っています。

〔関連資料〕 『東日本大震災における対応アンケート』 集計結果

横浜市子ども青少年局放課後児童育成課作成資料から抜粋

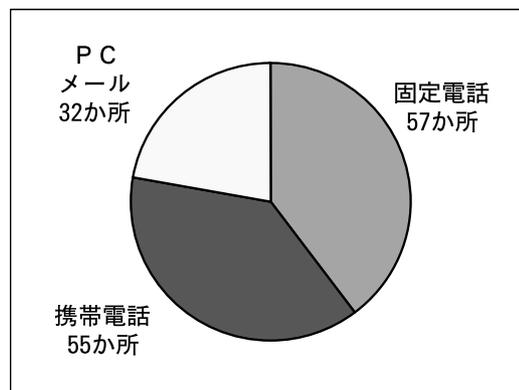
東日本大震災における対応について（放課後キッズクラブ）

【74か所 全クラブ回答】

1 発災当日、連絡の取れなかった保護者

0人	33か所
～10人	22か所
～20人	1か所
～30人	5か所
～40人	1か所
41人～	3か所
不明	9か所

2 保護者への連絡手段（複数回答）



※その他、学校一斉メールや保護者同士の声かけ等がありました。

3 発災時、まだ学校にいた児童（主に高学年）の、発災後の状況について

キッズには参加せず、全員を小学校で対応	14か所
原則小学校で留め置き、ただし、保護者のお迎えがない児童（留守家庭児童又は保護者と連絡が取れない児童）のみキッズに参加	4か所
指導員が小学校に引き取りに行き、キッズに参加	7か所
教職員がキッズに引率し参加	7か所
児童のみでキッズに参加	17か所

※その他、小学校集団下校後キッズで引き取りや教職員が引率しキッズに参加等がありました。

4 参加児童のうち保護者が迎えに来られず、キッズで過ごした児童、スタッフ

	か所数	児童数	スタッフ数
～19時	74か所	676人	231人
19～21時	47か所	122人	47人
21～23時	19か所	47人	19人
23～翌1時	6か所	11人	18人
宿泊	5か所	8人	13人

※一番遅い時間で翌8：30に保護者のお迎えがありました。

5 発災後、停電になったキッズ

鶴見	2か所	磯子	1か所	都筑	1か所
中	1か所	金沢	2か所	戸塚	2か所
港南	1か所	港北	2か所	栄	3か所
旭	3か所	緑	3か所		

※停電にならなかった区：神奈川、西、南、保土ヶ谷、青葉、泉、瀬谷

東日本大震災における対応について（放課後キッズクラブ自由記述）

6 小学校と連携できた事項、今後の課題

- ① 児童の居場所の把握
 - ・学校と一緒に避難し、児童の居場所を確認した。
 - ・キッズクラブ参加児童数を報告するなど、児童の状況を相互に情報交換した。
 - ・キッズクラブの名簿を渡し、学校が状況を把握した。
- ② 児童の安否状況
 - ・キッズクラブ参加者の安否を学校に報告した。
 - ・先生がキッズクラブを訪問し、参加児童の安否を確認した。
- ③ 情報共有（保護者の連絡との連絡や状況の確認等）
 - ・学校の一斉メールで保護者との連絡を行ってもらった。
- ④ その他
 - ・学校主導で避難を行った。
 - ・スタッフにも、職員と同じように情報を提供してもらった。
- ⑤ 今後の課題
 - ・保護者の状況把握のために、学校と情報共有を行う必要がある。
 - ・緊急時の児童の居場所について、学校と協議し、あらかじめ保護者に周知する必要がある。

7 今回の震災で困ったこと

- ・通常の通信手段がない場合の保護者との連絡
- ・停電への対応（計画停電含む）
- ・おやつを用意

8 今後、緊急避難時のために備えるべきだと思う物品

物 品	理 由
懐中電灯・ランタン・電池	停電対策、避難時に備えるため
ラジオ（電池を使用しないもの）、テレビ等	情報収集のため
カイロ・石油ストーブ等	防寒対策のため
防災頭巾・ヘルメット	児童の安全確保のため
食料（非常食）・水	お迎えが遅くなった時の対応のため

9 今後の課題、対策等

- ・学校や地域との連携強化
- ・避難訓練の実施及び避難経路の確認
- ・緊急対応のマニュアル作成、または見直し
- ・保護者との確実な連絡手段の確保

10 3月14日以降の状況について

- ① 学校と連携できた事項
 - ・学校から、キッズクラブの緊急対応についての資料を保護者あてに配布してくれた。
 - ・児童や保護者の情報を交換することができた。
 - ・協力して児童の状況把握を行うことができた。
- ② 課題となる事項
 - ・情報共有など学校との連携
 - ・緊急時の学校とキッズクラブ双方の対応の明確化

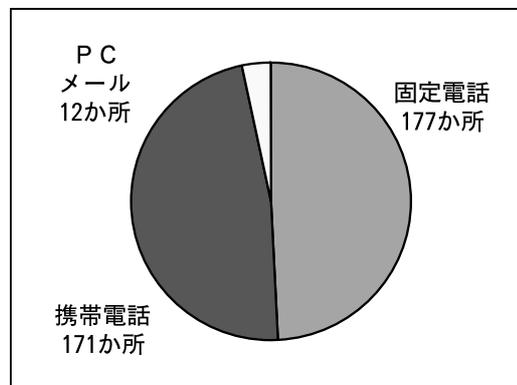
東日本大震災における対応について（はまっ子）

【277か所中244か所回答】

1 発災当日、連絡の取れなかった保護者

0人	126か所
～10人	78か所
～20人	16か所
～30人	14か所
～40人	4か所
41人～	4か所
不明	2か所

2 保護者への連絡手段（複数回答）



※ その他、学校一斉メールや個人の携帯電話、お迎え等がありました。

3 発災時、まだ学校にいた児童（主に高学年）の、発災後の状況について

「はまっ子」には参加せず、全員を小学校で対応	95か所
原則小学校で留め置き、ただし、保護者のお迎えがない児童（留守家庭児童又は保護者と連絡が取れない児童）のみ「はまっ子」に参加	32か所
指導員が小学校に引き取りに行き「はまっ子」に参加	10か所
教職員が「はまっ子」に引率し参加	9か所
児童のみで「はまっ子」に参加	15か所

4 参加児童のうち保護者が迎えに来られず「はまっ子」で過ごした児童、スタッフ

	か所数	児童数	スタッフ数
～19時	107か所	579人	168人
19～21時	62か所	154人	75人
21～23時	22か所	31人	22人
23～翌1時	5か所	5人	6人

5 発災後、停電になったはまっ子

鶴見	11か所	旭	8か所	青葉	5か所
中	3か所	金沢	15か所	都筑	6か所
南	2か所	港北	2か所	戸塚	11か所
港南	6か所	緑	6か所	栄	10か所

※停電にならなかった区：神奈川、西、磯子、保土ヶ谷、泉、瀬谷

東日本大震災におけるアンケート（はまっ子自由記述）

6 小学校と連携できた事項、今後の課題

- ① 児童の居場所の把握
 - ・はまっ子参加児童以外の子も含めて、6時以降は校長室で待機させてもらった。
 - ・はまっ子ルームではなく、体育館や個別級教室で待機できた。
- ② 児童の安否状況
 - ・最後の児童が帰った後、職員室に連絡を入れた。
- ③ 情報共有（保護者の連絡との連絡や状況の確認等）
 - ・職員の打合せにすべてチーフが参加させてもらったので、状況がよくわかった。
 - ・校長が丁寧に情報を入れてくれた。はまっ子の対応にも配慮してくれた。
 - ・緊急時対応として学校のメール配信にはまっ子の情報も載せてもらい、大変助かった。
- ④ その他
 - ・学校の非常用電力を使用させてもらった。
 - ・保護者対応を1本にできた。
- ⑤ 今後の課題
 - ・学校との連携がほとんどなく、学校側の対応についても把握できなかった。
 - ・保護者、学校、スタッフの対応の画一化が必要と感じた。普段からの関わり方が肝心。

7 今回の震災で困ったこと

- ・通常の通信手段がない場合の保護者との連絡
- ・お迎えに来ない家庭への対応
- ・食料等必要物品の準備

8 今後、緊急避難時のために備えるべきだと思う物品

物 品	理 由
懐中電灯・電池・ランタン	停電対策、避難時に備えるため
テレビ・ラジオ（電気を使用しないもの）	情報収集ため
防寒具・毛布・カイロ	防寒対策ため
防災頭巾・ヘルメット	児童の安全確保のため
食料（非常食）・水	お迎えが遅くなった時の対応のため
長いロープ	4階活動場所からの脱出用
大きなビニールシート	校庭でお迎えを待つ場合に備えて
救急セット	ケガに備えて
携帯電話用の電池式充電	固定電話がなかなか繋がらなかったため

9 今後の課題、対策等

- ・部屋内の荷物・道具等配置の見直し、危険箇所のチェック
- ・地域の防災訓練への参加
- ・緊急対応のマニュアル作成、または見直し
- ・土曜日・長期休み・代休日など、はまっ子しかいない時の対応
- ・保護者が迎えにこられない場合の児童の引き取りのシステム
- ・引渡し夜間になる際の待機場所の確保（特に冬）

10 3月14日以降の状況について

- ① 学校と連携できた事項
 - ・集団下校のグループ分け、ルート、引き渡し場所の地図といった情報をもらった。

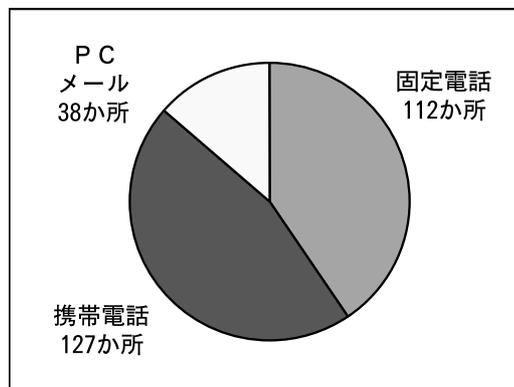
東日本大震災における対応について（放課後児童クラブ）

【196か所中158か所回答】

1 発災当日、連絡の取れなかった保護者

0人	116か所
～10人	33か所
～20人	5か所
～30人	1か所
～40人	0か所
41人～	2か所
不明	2か所

2 保護者への連絡手段（複数回答）



※その他、学校一斉メールや保護者同士の声かけ等がありました。

3 発災時、まだ学校にいた児童（主に高学年）の、発災後の状況について

放課後児童クラブには参加せず、全員を小学校で対応	26か所
原則小学校で留め置き、ただし、保護者のお迎えがない児童（留守家庭児童又は保護者と連絡が取れない児童）のみキッズ・はまっ子に参加	11か所
指導員が小学校に引き取りに行き、放課後児童クラブに参加	100か所
教職員が放課後児童クラブに引率し参加	50か所
児童のみで放課後児童クラブに参加	76か所

4 参加児童のうち保護者が迎えに来られず、放課後児童クラブで過ごした児童、スタッフ

	か所数	児童数	スタッフ数
～19時	142か所	1,494人	440人
19～21時	127か所	607人	324人
21～23時	75か所	209人	168人
23～翌1時	49か所	95人	104人
宿泊	30か所	47人	81人

※一番遅い時間で翌13時に保護者のお迎えがありました。

5 発災後、停電になった放課後児童クラブ

鶴見	7か所	磯子	1か所	青葉	6か所
中	2か所	金沢	4か所	都筑	4か所
港南	1か所	港北	1か所	戸塚	8か所
旭	4か所	緑	5か所	栄	5か所

※停電にならなかった区：神奈川、西、南、保土ヶ谷、泉、瀬谷

東日本大震災における対応について(放課後児童クラブ自由記述)

6 小学校と連携できた事項、今後の課題

- ① 児童の居場所の把握
 - ・学校留め置きの子童については指導員がお迎えまたは保護者引き取り。
 - ・下校途中の子童の居場所確認を指導員及び教職員と行う。
- ② 児童の安否状況
 - ・学校で引き取り時に確認。
 - ・放課後児童クラブに引率してきた教職員との間で確認。
- ③ 情報共有(保護者の連絡との連絡や状況の確認等)
 - ・放課後児童クラブも学校からの一斉メール配信を利用している。
 - ・学校から放課後児童クラブへ引き取り時点での情報共有を行った。
- ④ その他
 - ・スムーズな引き渡しができた。
 - ・日頃より学校と話し合いができていたため、大きな混乱はなかった。
- ⑤ 今後の課題
 - ・学校により緊急時の対応が異なり、連携が難しい。
 - ・さらなる学校との情報共有が必要。
 - ・学童で引き取るよりも、学校に留め置きの方が安全なのではないか。
 - ・保護者や学校との緊急時の連絡手段の確保。
 - ・下校途中の子童や、放課後児童クラブを欠席予定の子童の安否確認をどのように行うか。

7 今回の震災で困ったこと

- ・学校による緊急時の対応の違い
- ・通常の通信手段がない場合の保護者との連絡
- ・停電への対応(計画停電含む)
- ・下校途中の子童の安否確認

8 今後、緊急避難時のために備えるべきだと思う物品

物 品	理 由
懐中電灯・ランタン・電池	停電対策、避難時に備えるため
ラジオ(電池を使用しないもの)、テレビ等	情報収集のため
カイロ・石油ストーブ等	防寒対策のため
防災頭巾・ヘルメット	児童の安全確保のため
食料(非常食)・水	お迎えが遅くなった時の対応のため
布団・毛布・寝袋等	帰宅困難時の宿泊対応のため

9 今後の課題、対策等

- ・学校や地域との連携強化
- ・保護者との確実な連絡手段の確保
- ・災害伝言ダイヤルや災害伝言板の活用
- ・建物の安全性や耐震対策
- ・避難訓練の実施及び避難経路の確認
- ・緊急対応のマニュアル作成、または見直し

10 3月14日以降の状況について

- ① 学校と連携できた事項
 - ・給食の有無、下校時間などの連絡やメール配信による情報共有
 - ・学校と災害発生時の対応や引き取りについての調整を行った
 - ・学校で実施する放射能による外での活動制限について情報共有
- ② 課題となる事項
 - ・児童の状況把握や情報共有など学校との連携
 - ・緊急時の学校と放課後児童クラブ双方の対応の明確化

特集 2.

被災者受入施設の状況と課題

◆ 野島青少年研修センターの東日本大震災に伴う被災者の受入と対応

横浜市野島青少年研修センター センター長 伊藤 豊

野島青少年研修センターの東日本大震災に伴う被災者の受入と対応

横浜市野島青少年研修センター センター長 伊藤 豊

2011年3月11日に発生した東日本大震災を受け、横浜市は被災者を受け入れることを決め、200人までの宿泊設備を備えた横浜市野島青少年研修センター（以下、研修センター）も避難所の一つとして開設することとなりました。

地震発生直後に安全確認を行い、施設としての利用継続が可能であることが確認されると、4月の避難所開設にむけての準備が始まりました。横浜市副市長をはじめ、担当職員の方が研修センターの下見に訪れ、施設の状況確認をされました。被災者の受け入れ、避難所の開設というのは、勤務している職員にとっても初めてのことであり、様々な点について検討を重ねていきました。

研修センターでは、3月11日は、3団体の宿泊予定がありました。

地震発生後、2団体は宿泊中止となりましたが、既にセンターに到着していた団体のおおよそ30人は、帰宅困難との事で、センター職員2人、警備1人と共に宿泊となりました。

幸い、センターの建物に被害はなく、土台がしっかりしているのか、余震の揺れも感じませんでした。テレビでは、信じられない光景が映し出されており、心が張り裂けるようでした。夜になり、近隣の住民が、余震がひどく怖いので、避難させてほしいとセンターに集まってきました。急遽、和室などを提供し、宿泊していただきました。また、センターに保存しているお米などを使用し、おにぎりとお味噌汁を提供させていただきました。

しばらくは余震が続くとのことで、3月中旬頃までの宿泊予定団体には全て中止をお願いしました。その後、建物の耐久性などの検査が入りましたが、センターは問題なく運営可能とい

うことでした。その後、センターを被災者の受入施設にという提案が出され、職員一同、受け入れ準備にあたって課題となったのが、日常生活の場として利用するということでした。もともと、宿泊研修施設ですので、個室の宿泊室や厨房、浴室はありますが、洗濯する設備はありません。また、長期滞在を目的に設計されていない点、近くに海があるという立地条件、食事の提供ができない点など色々な意見があがりました。横浜市の職員の方も何度も施設を見て回っていらっしゃいました。

話し合いを重ねて、当時の状況（大きな体育館での雑魚寝）を考慮し、ベッドがあり、個室の空間を確保できる研修センターを被災者の受け入れ施設にする事が決まり、すぐに受け入れに必要な物（洗濯機など）の準備に追われました。

被災者は個人や家族などでやってきて、一日の行動はそれぞれバラバラになることも考えられました。そのため、個人の行動に支障がでてしまわないように今回あたらしく設定すべき基準、従来通り守ってもらう点を整理して「利用の手引き」を用意しました。

4月2日、たきがしら会館（磯子区）を利用している被災者を対象とした見学会を実施しました。個人や家族の代表でいらした方の他、お子さんを連れて参加している方もいました。施設内を案内し、個室利用が可能なこと、浴室や厨房設備が整っていることなどを紹介すると、プライバシーが守られ、生活はしやすくなると感じてもらった反面、すぐそばに海があるということから、津波の被害にあわれた方々からは不安の声が多く聞かれました。その後、たきがしら会館から移転して来られた4人を受け入れ

て、避難所としての利用が始まりました。

みなさん移転された当初は、市や区役所の担当職員の方と話し合うなど忙しく過ごされていたようです。しかし、だんだんと時間経過して研修センターでの生活が落ちついてくると、2Fのホールに用意したパソコンやTVでの情報収集や、読書をする姿を見かけるようになりました。一時的に地元を離れた人、生活を横浜（関東）に移す人、理由や状況は様々ですが、研修センターに移ってきた方は、それぞれ日常的な生活をおくっていくことを望んでおられたようです。

施設を運営している私たち職員も、みなさんの生活の様子に分かってくると、次第に当初用意していた「利用の手引き」だけでは十分ではないということがみえてきました。そこで、利用している方や市担当職員との話し合いの場を設け、一緒に利用方法について見直し、必要に応じて対応策を用意していきました。これは長期化する共同生活をお互いに気持ち良く過ごしていくうえでとても重要だったのではないかと思います。そして職員同士は情報の共有を密に行い、状況の把握に努めました。

また、受け入れ施設に決まり、4月6日の記者発表がなされるとすぐに、被災者の方の為に何かお手伝いをさせていただきとの問い合わせがくるようになりました。その内容は様々で、美容師の方からの散髪の提供、近所の方からの話し相手のボランティア、企業の方からのロッカーの貸出しなど、多岐に渡っていました。飲食物や生活用品の提供も度々ありました。ボランティアの中には、以前から研修センターで就労体験を行っていただいている、NPO法人ヒューマンフェローシップの方々もいらっしゃいました。自転車を運んできてくださったり、物資を運んできてくださったりと精力的に活動していただきました。改めて、人の優しさ、心の温かさを感じる事ができた日々でもありました。

ただ残念だった事は、青少年研修センターの役割やイメージから、子どもが避難してきていると思った市民の方が多数いらしたことです。子供服やおもちゃ、学習教材などの支援の申し出をされる方が多かったのですが、センターに避難してきていただいた方は、単身の男性が多く、折角の好意を受け取る事ができずに、何とも言いようのない気持ちにもなりました。

被災者とボランティアの希望のマッチングがうまくいかなかった事以外に、避難所運営を行っていく中ではがゆい思いをした事がもう一つあります。

それは、被災者ではない方が、作為的、非作為的にセンターに被災者として生活を送っていたことです。センターに入所する際に、被災者の方からの申告をもとに受け入れを行っていましたが、身分証のない方も多く、全て被災者の方からの一方通行の情報しかありませんでした。現場も混乱しており、仕方のない状況だったとはいえ、もう少し事前の情報確認ができなかったのかと考えさせられました。また、食材の盗難なども発生し、今まで対応した事のないような事案が度々起こりました。その中でトラブルも増え、被災者同士の中で疑心が芽生えていくのが分かりました。そこで、週1回以上、被災者の方、横浜市の職員、センターの職員も参加して、話し合いの時間を設ける事にしました。その中で、共同生活を送る上で、お互いが気持ちよく生活していく為のルールの取り決め、食材の管理方法などを1つずつ決めていきました。

その結果、徐々にトラブルも減少していきました。コミュニケーションの大切さ、共同生活の大変さなど、多くの事に気付かされながら、なんとか1つずつ問題を解決していきました。

その後、被災者の方は、それぞれ仕事や住む家を見つけ、センターを退所されていきました。皆さんが笑顔での退所という訳にはいきませんが、多くの人の優しい協力と、被災者の

方の努力、被災しても前に進んでいく強さ、心遣いによって、センターの避難所運営をすることができました。

避難所利用の開始に向けて、もう一つ重要な作業がありました。それは研修センター利用中止の連絡です。すでに新年度の利用予約を受けていたため、職員総出ですべての学校や団体（のべ134団体）へ利用の中止とお詫びを伝えました。特に学校利用に関しては、前年度の秋から利用申し込み・抽選、説明会、利用申請手続きと時間をかけて準備を進めており、中には事前の打ち合わせを済ませている学校がいくつもありました。突然の研修センター利用中止ということで、学校行事の一つである体験学習の実施そのものを再検討する事態に至ってしまう学校もあったようです。

今回は、研修センターに限らず、市内の野外活動4施設で避難所開設が決定されたため、その影響はとて大きかったと考えられます。活動そのものが延期・中止になるというのは、学校に限らず研修センターを利用している団体にも同様に影響を及ぼすことになりましたが、職員が経緯を説明すると、事情をご理解いただくことができました。また、地元町内会など地域の方へも避難所開設について説明し、ご理解をいただきました。

研修センターには、随時移転を希望される方がいらっしました。そしてそれぞれ、新たな生活を築くために旅立っていき、7月中旬に受入れ人数がゼロとなりました。そして横浜市から避難所の閉所と、8月から研修センターの通常利用を再開するという決定がくだされました。

利用再開に向けての準備はまず、毎月の利用抽選会や事前打ち合わせ会のスケジュールの再設定から始まりました。研修センターが例年最

もにぎわう夏休み期間が迫っているため、8月の利用抽選会と打合せ会を早急に実施しなくてはいけませんでしたが、市からの利用再開の発表に合わせて、3月に利用取消しを知らせた団体、学校の他、過去に利用のあった団体へ利用再開と、抽選会の実施を知らせました。8月分の抽選会は7月30日実施ということで、周知する時間も受付期間も十分ではありませんでしたが、6つの団体の参加がありました。11月分まで8月は毎週末に抽選会を設定しました。ただ、事前打ち合わせ会について8月中の利用には設定することができなかったため、利用日当日、入所の前に打ち合わせを行いましたので、利用団体の担当の方には活動プログラムの調整など慌ただしくさせてしまう場面もあったかもしれません。研修センターでの活動を円滑にすすめるためにも、利用団体と職員が活動について話し合い、相談を受ける機会の重要性を再認識しました。

8月はのべ13団体483人の利用がありました（日帰り利用を含む）。8月以降も序々に再開について問合せが増え、例年通りとはいきませんが、序々に利用いただけるようになっていきました。

この度、被災者の方とは多くの時間を共有し、震災時の話も伺いましたが、今その話を思い返しても、多くの方が犠牲になり、多くの涙が流れたあの震災を、ありきたりな表現ですが、決して忘れてはいけなと強く思います。

そして、微力ながら、被災されて傷付かれた方の笑顔を取り戻すお手伝いが出来た事を嬉しく思います。これからも人の笑顔の為に、何が出来るかをセンター職員だけでなく、センターを必要としてくださる皆さんと一緒に考えて運営していきたいと思ひます。

特集 3.

公開シンポジウム

『震災と子ども・若者のこれから』報告

◆ 公開シンポジウム『震災と子ども・若者のこれから』実施報告

横浜市青少年育成センター 七澤 淳子

公開シンポジウム『震災と子ども・若者のこれから』実施報告

横浜市青少年育成センター 七澤 淳子

あらためまして、東日本大震災で被害にあわれた皆さまに謹んでお見舞い申し上げます。

■ はじめに

横浜は直接的被害は少なく、日が経つにつれ以前と変わらぬ日々に戻っていったように思う。しかし、初めて直面する事態に人々は戸惑い、不安を感じ「この先のこと」について考えざるを得なくなったであろう。少なくとも私は、「明日のことは分からない」ということを初めて本気で意識した。

では、普通の毎日に戻ったと思われる横浜の子ども・若者たちに、この震災はどのような影響をもたらしたのだろうか。大人に比べ、絶対的に経験が乏しい彼らの胸にはどのようにこれらの出来事が刻まれたのだろうか。それとも特別な影響はなかったのか。そして、ますます先が見えなくなってきた就労問題をはじめ、「自分が大人になった姿」を思い描くことができるのだろうか。

そして、大人たちはどうだろうか。子ども・若者を取り巻く環境や地域のあり方などについて「今のままでよいのか」という思いを抱いた人も多いのではないかと思われる。これは、今まで日常に埋もれ気づけなかった・あるいは見過ごしていた課題が明らかになり、それらに対しどのように向き合うのが問い直されていることに気づいたからであろう。もちろん、私たちよこはまユースの職員も、青少年を支える事業や施設のあり方について「このままでよいのか」と見直しを迫られた。

私自身、すぐに方向が見出せたわけではない。ただ、青少年を育てていく地域づくりの取り組みも、青少年が生きる力を身につけていけるため

の取り組みも、より現実的に『必要なことなんだ』と感じるようになった。

こうして、若者に関わる人や若者自身から話を伺い、事実を知り、子ども、若者のこれらを、大人たちの役割について参加者と考える機会を持つことを目的に本シンポジウムは企画された。

■ 「居場所、子ども・若者の力、地域・大人の役割」

久田邦明先生をコーディネーターに迎え、副題を「居場所、子ども・若者の力、地域・大人の役割」として内容をすすめていった。

被災地の高校生たちが、互いに支えあう“仲間たち”とともに始めた活動を支援する、ピアサポートネットしぶやの石川隆博さんに「被災地の居場所づくり」の高校生たちの様子を報告していただいた。石川さんたちは1年経った現在も活動を継続している。また、横浜における若者をめぐる就労や生活の影響については、ユースポート横濱の岩永牧人さん、若者自身の声として、被災地でのボランティア活動に熱心に取り組んでいた神奈川大学の杉野谷和孝さんに報告をお願いした。

シンポジウム当日は、盛岡や福島、静岡などの遠方からや国や都の行政職員、学生など地域も所属もさまざまに、50人ほどの参加があった。さらに、震災当日のことや気持ちを参加者に記してもらい模造紙に貼り、意見交換時に振り返った。参加者からも多くの意見が出て、活発なシンポジウムとなった。

キーワードは岩永さんから出た「誰もが当事者」になったという言葉だろう。横浜で暮らす私たちはこの震災でどれだけのことを「当事者」として考えられただろうか。子ども・若者の課

題についても職業や役割としてだけでなく、今を生きる大人として、きちんと向き合わなければいけない。これらのことを参加者と確認したとともに、私たち子ども・若者に関わる者たちがどれだけそうした社会や地域を作っていくことができるのか、改めて気持ちを引き締めた。

1 実施日時：平成23年11月5日（土）
13時30分～17時

2 内 容：

■第1部：活動報告「岩手県大槌町ではじまった地元高校生たちによる居場所づくり」

報告者：

石川隆博（NPO法人ピアサポートネットしぶや）

■第2部：シンポジウム「子ども・若者の力とこれからの地域社会」

・報告者：

石川隆博（NPO法人ピアサポートネットしぶや）

岩永牧人（NPO法人ユースポート横濱）

杉野谷和孝（神奈川大学 4年生）

・コーディネーター：

久田邦明（神奈川大学講師）

■第3部：会場との意見交換

【要 旨】

第1部 活動報告「岩手県大槌町ではじまった地元高校生たちによる居場所づくり」

岩手県大槌町安渡地区の避難所で、忙しい大人たちに代わってボランティア活動をする高校生たちを紹介する新聞記事（H23.5.11付朝日新聞「いま 子どもたちは ～震災を生きる」）をきっかけに、都立高校の生徒有志と同世代交流をしに行ったことが始まりである。

安渡地区の高校生たちは、「仲間がいたから辛くなかった」と言っていた。進学予定だったが地元に残って就職する子、自宅が津波被害に遭わなかったことで申し訳なさを感じている子

など、話してみるとさまざまな思いを持っていた。そして、避難所が閉鎖され仮設住宅に移ると、彼らは離れ離れになってしまうことが分かった。「みんなとワイワイ話している時が一番楽しい」「場所があれば、集まりたい」という彼らに、ピアサポートネットしぶやでは「みんながいたから乗り越えられた、という気持ちを掘り起こせたら」と、ノウハウを活かし、彼らが集まることのできる「居場所」を地区内につくっていこうと考えた。現在、少しずつであるが進んでいる。



神奈川新聞（2011年11月6日付）に掲載。

第2部 シンポジウム「子ども・若者の力と、これからの地域社会」

A) 実践報告

① 岩永 牧人さん

相談者には、職に就けないという事実だけでなく背景に課題を抱えているケースが多い。2008年のリーマンショックにより「今まで働いていた人」たちが働けなくなった。不況が続く中、震災でトドメが刺されたように感じる。近い現象は横浜でも見られ、職を失うと同時に住まいを失った人の相談が多くなった。今回の震災により、「仕事が無くなるのは一部の人」という意識ではなく、誰もが「明日のことは分からない」という気持ちになり、みんなが「当事者」になったのではないかと。目標は就職するこ

とではなく、まず安心して生活できることになったと思う。

これからは他人事としてではなく当事者として問題を捉えること、そして互いを気にかけることが大切。これからは人々の「語りなおしのプロセス」にマラソンの伴走者のように耳を傾けていきたい。

② 杉野谷 和孝さん

3月11日は就職活動で池袋にいた。面接は中止になり家までの道りを徒歩で帰った。「就職もどうなるか分からない。自分には心配する明日がない」と、不安のあまり周囲の人たちと声をかけ合う気にはならなかった。一方で、大学のボランティア支援室の代表として「何か活動をすべきではないか」という思いがあり、横浜災害ボランティアバスへの参加を即決し4月に気仙沼に向かった。初めて被災地を訪れた時はその景色に言葉にならず、「明日が来るということは奇跡なんだ」と思った。その後3回ほど被災地を訪問した。被災者の方たちはいつも気を遣ってくれ、「励ます”なんていう言葉はおこがましく「ボランティアとは何か」ということを改めて考えさせられた。



B) 意見交換

■復興やエネルギー問題含め、確実に次世代へ続いていく課題について、景気や就労問題を含めて、子ども・若者に“ツケを回している社会”である、ということが改めて顕在化したことについてどう考えるか。

(岩永)：震災があったから社会が変わったわけではなく課題が露見されただけ。若い人が努力しても報われにくい。若者が主体になる「土台」がない中で「期待」するだけで終わってしまっている。

(杉野谷)：「君たちに任せた」「期待している」と言われても、「勝手に押し付けないで」というのが本音。負の遺産を自分たちに都合よく押し付けられている気がする。一方、声をあげても、自分や自分の周りでは「そんなことをしても変わらない」という冷めた視点がある。

(石川)：「想定外」という言葉が都合よく使われている気がする。若者には期待というより、お願いをしなくてはしょうがないのではないかと。

■「これから」についてどう考えているか。

(岩永)：何が正しいのか分からなくなっている。一人ひとりが考えることも大切だが、これからのことを国全体で考えていくことが重要だと思う。3月11日のことを伝えていくことも必要。このことで各人のストーリーが複雑化している。「聞いていく」ことが私たちの役割。

(杉野谷)：就職面接の質問によくある「5年後の自分について」が、震災後、全く思い描けなくなった。5年後・10年後、仕事ではなく自分自身はどうしたいのか・どうなっていたいのかをできる限りポジティブに考えていこうと思っている。

(久田)：戦争の話も伝えていくことが大切、と分かっているけど実際は忘れられていく。震災の話も、自分が体験したこと・経験したこと・見たこと・あったことを「忘れないこと」「次世代に伝えていくこと」が、これからの私たちの使命ではないか。

C) まとめ「これから」に向けてのメッセージ

(岩永)：企業などが「これから何ができるか」を考えはじめている。今まで若者の現状を伝え

てきたがなかなか理解してもらえなく平行線になっていた。人々が「他人事」が「自分ごと」になってきていることは、「これから」を考える上で少し明るい材料かもしれない。

(杉野谷)：2011年は自分の人生のターニングポイントになると思う。学生ボランティア支援室でも、被災地支援活動は時間をかけて続けていけるよう後輩たちに伝えたい。来年から社会人になるが、引き続き関わっていきたくと考えている。

(石川)：高度成長期に生まれた自分がいかに物に恵まれていたか分かった。物がなくても人が立ち上がる、人こそ力ということが大槌町に通うようになってから実感しているし、もう一度そのことを人々が思い出すことが必要だと思う。

(久田)：色々な立場からの話が出た。今回の震災で課題が出たのではなく、見えてなかったもの・見ないようにしていたことが顕在化したのだと思う。関係性が分断されてしまったことをどうしていくのか。エネルギー問題にしても、一人ひとりが真剣に向き合わなくてはいけない。今日の参加者が3月11日のことを再度考える機会がもてたので、皆が「忘れない・伝えていく」ことをおこなっていく必要がある。

◆参加者の「3月11日のわたし」<抜粋>

- ・ 停電、携帯電話もつながらず、安全な場所にながら隔絶感があった。家族に会えるか不安だった。
- ・ 徒歩で帰宅途中、家電量販店で生中継のニュースを見た。目を疑った。
- ・ 学童の子どもたちをどう帰宅させるか打合せ。つながらない電話。不安な子どもの対応。
- ・ 福島の職場で卒園式。吹雪の中、一晩中余震のたびに子どもたちを外に避難させていた。

◆参加者が震災で感じたこと、見えたもの<抜粋>

- ・ 「知ること」「忘れないこと」の大切さ。
- ・ 今、隣に誰が住んでいるか知らない状況を何とかしなければと思った。
- ・ 無意識にイメージする「未来」が変化し、今を大切にしようという意識が生まれた。
- ・ 家族や友人との関係性。大切さ。
- ・ 無力感、人間のおごり。
- ・ 苦しいことに直面した時、その感情を外に出す難しさ。
- ・ 「誰かのために」が大きくなって自意識ばかりがふくらみ活動するのが嫌になったが、3回目に被災地へ行き「この人たちにまた会いたい」というシンプルな気持ちが活動のエネルギーになった。

◆参加者の感想 <アンケートから抜粋>

- ・ 自分にできる伴走の仕方、伴走者としてのあり方をよく見て見直してみたい。
- ・ 若者のひとりとして、いま目の前の仕事・目の前にいる人のために前向きにひとつひとつやっていきたい。
- ・ それぞれができる範囲での役割を果たすことができる社会に向かうように、何か進められないかと思った。
- ・ 感情の掘り起こし、感情の共有ができたらいのかなと思った。人と人がつながる（寄り添う）ことの大切さ、思いやるということ



参加者が書いた「3月11日のわたし」

を行動に移す勇気がほしい、声をかけていこうと思った。

- 当事者意識を持つこと、社会のせい、人のせいにしないことは改めて大切だと思った。
- 何が本当なのかを原点にして考えたい。
- 困難な状況にある人たちが、そうでない人と同様ではなくても、少しずつでも社会の中で役割を担っていけるようなしくみが整っていくことを期待している。
- 震災のことを自分が忘れてしまっていることに気づいた。絶対忘れない、と思っていたのに。
- 日常の大切さ、ありがたさを改めて実感した。つらいことから目を背けてばかりでは問題は

解決しないかもしれないが、それでも前向きに希望をもって、現実的にできることから丁寧にやっていくしかない。

- 若者を支える大人の存在が必要という言葉は、シニア世代になっている私たちの責任だと思った。
- 行政依存、他者依存の傾向がやはりどこかにあって、当事者意識をもっても行動に移せない人が多いのだと思う。自ら主体者としてどう動くかが、復興にしろ地域のまちづくりにしろ大切だと思う。
- 日本の社会にすでにあった問題が（ある程度予想できたことも、想定外のことも含めて）震災で目前につきつけられた。

特集 4.

被災地でのボランティア活動から感じた 青少年の報告

◆ 3.11から学ぶ事とこれから

神奈川大学法学部自治行政学科 4年 杉野谷 和孝

3. 11から学ぶ事とこれから

神奈川大学法学部自治行政学科4年 杉野谷 和孝

未曾有の大震災から1年が経過し、各地で慰霊祭が開催されたが当時の記憶が少しずつ薄れてきているように思える。誰もがあの日から1年が経ったと思うと1年の月日がとても早く感じてしまうのではないだろうか。

あの日、私は就職活動で池袋にいた。首都高速道路の真下を歩こうとしたときに大きな揺れが襲い、一瞬何が起きたのか分からなかった。周囲も騒然とし、地震が起きたという実感は地震が収まった後のことであった。すぐに携帯電話で情報を収集し、東北地方において震度7と言う極めて異常な事態が起きた事を知った。16時から予定されていた選考会は中止され、気を付けて帰宅するようにと人事担当者から言われたが、鉄道は全線ストップ、道路は既に渋滞しておりバスを待つ列はどこが最後尾なのかが分からない程になっていた。この時点で私はもう歩いて帰宅するしかないと思い、約20キロの道のりを歩いて帰ることにした。自宅へ向かっている途中、周囲の社会人の会話がよく耳に入ってきた。その会話が耳に入って来る度、自分は来年の4月から社会人として働く先が見つかるのだろうか。これから日本はどうなるのだろうか、と言う不信感が募った。

この後、スケジュール帳にぎっしり書いてあった就職活動のスケジュールはほとんどが中止となり、約1か月間中断を余儀なくされた。その間選考途中であった数社から、震災により業績に大きな影響があったとの理由から採用見送りとなった会社もあった。毎日1日2社から多い日には3社回っていた自分自身にとって、この中断は精神的に辛い状況であった。更に繰り返し流される津波の映像と、福島第一原子力発電所事故の報道。来年社会人になる自分自身にとっ

て、日本で今起きている事を知っておくべきだと思い、自ら傾聴活動を行うボランティアとして東北に行くことを志願した。



2011年4月下旬、私は震災後初めて被災地である宮城県気仙沼市を訪れ、震災の生々しい傷跡と苦しい避難所生活を目の当たりにした。当時は避難所においても断水している地域が多く、日常生活を送る事も苦しい状況であった。高速道路を僅か8時間しか走っていないにも関わらずバスを乗った場所と降り立った場所は、180度違う世界。これが同じ日本なのか。私は現実を受け入れる事がなかなか出来なかったが、各避難所を訪問すると皆さんが温かい笑顔で歓迎してくれた。しかし、私は被災された方の笑顔を見るのが余計に辛かった。辛い状況にも関わらず、無理をして笑顔で接してくれているのではないかと思ったからであった。この時、自分自身が感じた3.11とは全く違うのだと実感した。最初のボランティアの行程を終え東京に着いた時の違和感は今でも忘れられない。

それ以降、私は被災地へ赴く度に日常では感じない緊張感を持って被災地へ行っている。平和な日常生活が営まれていた中で突然の悲劇が起き、親類や友人を亡くしてしまった方々など

う接したら良いのか、私自身の言動で被災者の心を傷めたりしないかと言う緊張感である。初めて被災地を訪れた際はそう言った事ほとんど考えていなかったが、実際に被災された方とお話して、自分は今苦境に立たされている方々と接しているのだと言う事を知った。だが、無理に被災者の方を勇気づけるのも被災者の方にとって重荷になる。逆に神妙な面持ちで向き合うのも違和感がある。やはり日常の面持ちで被災者の方と接するのが一番なのではと思うのだが、日常の面持ちが一番難しい事である。

私はこれまで4回被災地に入っているが、中でも3度目に訪ねた際に聞いた話が特に印象に残っている。地域コミュニティの再生の為に遠野まごころネットが行っている「お茶っこ隊」の活動に参加した際「自分の命を守る為に、二人の命を犠牲にしてしまった。私はそれが罪悪感でたまらない。」と話していた方がいた。この方のお話を聞いた時、自分はどうしたら良いのか分からなくなってしまった。ここには大きな苦悩を抱えて生活している人が大勢いる。その方々に対して私たちが出来る事は何なのか、改めて問われているように思えた。



それから数か月後の事である。就職活動も無事に終わり、自分自身に少し余裕が出来た頃、知人から東日本大震災の脱風化プロジェクト設立の話が来た。首都圏では特に東日本大震災の風化が進んでいる。世間から震災を忘れてもら

わない為にも一緒に活動してくれないかと誘われた。この時、私たちが今出来る事は何なのかを模索していた自分自身にとって非常に良い話であった為、この話を私は快諾した。そこで設立したのが学生団体Air.である。Air.は東日本大震災の脱風化を目的とした学生団体であるが、一般的な復興支援団体にはない「自由さ」・「気軽さ」を重要視している。これは緩い枠組みの中での方が継続的に、そして楽しく活動出来るからである。この趣旨に賛同して参加してくれた学生は2月末現在で既に80名を超えた。2011年の12月末に設立した団体にも関わらず、僅か2ヶ月で80名の参加者がいると言う事に、学生だからこそ出来る事がこれから沢山考えられるのではないかと感じている。Air.は今後、被災地においては市民交流と農業体験を目的としたボランティアバスツアーの企画、非被災地においては脱風化に向けたイベントの企画等を検討している。

あの日から1年が経ち、これから更に東日本大震災の風化が進むことは間違いないであろう。しかしあの日に何が起き、人々は何を感じ、何を考え、どのような行動を起こしたのかをこれから後生に語り継ぐと共に教訓としなければならない。私達若者は、被災地に行くだけではなく、後生に伝える事も大事な役目ではないだろうか。今回の震災を通じて、私は社会人になる事の意味、そして若者がこの日本に対して何が出来ることについて学ぶ機会となった。この学んだことを今後社会人として活かしていきたいと思う。

特集総括

震災時対応に関する学識者の寄稿

◆ 子ども・若者の支援と大人の課題

神奈川大学講師 久田 邦明

子ども・若者の支援と大人の課題

神奈川大学講師 久田 邦明

東日本大震災から瞬く間に一年が過ぎた。その間、被災地の人々の活動などから学んだことは多い。それを糸口に、大人に求められる、子ども・若者支援の課題を三点にわたってまとめてみたい。

震災の直後、政治家・お役人・学者・企業人などの責任ある立場の人々の姿をみて気づいたことがある。それは、非常事態が起きて、人は急に変わることはできないということだ。これは決して他人事ではない。子ども・若者のところからみれば、わたしも、そういう大人の一人だろう。そうであれば、常日頃の考え方や行動が問われるのだ。まずこのことを確認しておこう。

子どもと若者の居場所を

第一に、居場所づくりの大切さである。

居場所づくりによる地域社会の再生を提案してきたわたしは、強大な外部の力によって地域社会が吹き飛ばされる情景をみて、居場所などと生ぬるいことをいってよかったのかと思った。津波によるまちの消滅、放射性物質の飛散によるまちぐるみの住民避難を目の当たりにすれば、居場所づくりといった小さな活動の無力さを考えないわけにはいかなかった。

ところが、震災直後から、支援者や被災者の手で被災地の各所に、人の寄り集うところ、すなわち居場所が誕生する姿をみた。震災の数日後、テレビニュースで、被災地の事業所に子どもの居場所が設けられたことを知った。短時間の映像だったが、被災した子どもがそういうところを必要とする切実さが伝わってきた。同じ頃、セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンという国際的なNGOが、仙台市内の避難所で「こど

もひろば」を始めて、宮城県、岩手県内の避難所に開設するようになった。また、6月には、被災地支援のNPOのつなボラが、宮城県石巻市に、中・高校生を対象とした、自主学习と遊び・おしゃべりのための「ほっとスペース」を開設した。驚いたことには、ここに集まった中学生たちは、10月から、被災者のために仮設住宅で、「ほっとカフェ」を週末に運営するようになったという。

このような活動を知って、居場所づくりが被災地において短期間に凝縮されたかたちですんでいることに気づいた。居場所は、地域社会が吹き飛ばされるような非常事態のなかでこそ必要とされるものだった。

社会起業家の第一世代とわたしが呼ぶ、若い世代の活躍にも注目した。首都圏で高校生や大学生の支援をしてきたカタリバは、7月から宮城県女川町と岩手県大槌町で「放課後コラボ・スクール」を運営している。同じく首都圏で病児保育をおこなってきたフローレンスは、東京への避難者の保育支援や被災地の中・高生の学習支援に続いて、12月から福島県郡山市で未就学児のための「ふくしまインドアパーク」を運営するようになった。これらの活動も、広い意味で子ども・若者の居場所づくりといえるだろう。

非常事態が起きて、人は急に変わることはできないのであれば、常日頃の活動に着目する必要がある。その意味で、ふりーふらっと野毛山（横浜市青少年交流センター）をはじめとする、横浜市内の居場所の活動を大切にしなければならぬと思う。



ふりーふらっと野毛山（横浜市青少年交流センター）の「カードゲーム大会」。青少年委員（中学生～24歳）の発案で始まり、自主的に運営されている。

人の寄り集うところを

被災地で居場所を求めたのは、子どもや若者だけではない。5月から、介護者サポートネットワークセンター・アラジンは、「パラソル喫茶」という屋外のカフェを、宮城県と岩手県内の避難所、仮設住宅、公民館前などで始めた。阪神淡路大震災で被災した理事長の「避難所や仮設住宅を転々とする被災者はコミュニティを4回以上失う」ということばのとおり、被災地にこそ、人の寄り集うところが必要とされるのだ。

じっさい、被災地の各所に「喫茶」とか「カフェ」とか「お茶っこ」とかいう名前の居場所がつくられている。お茶っことは、「お茶っこすっぺし」という東北地方の日常語を使ったことばだ。これらの活動のなかで、宮城県巨理町の「巨理いちごっこ」の場合、集会所の一室を借りて始めた活動が、空き地にプレハブ小屋を建てて運営するようになるという、まるで住民施設の誕生をおもわせるような経過を辿っている。

住民施設を若者が中心になって建設した事例もある。5月、岩手県大船渡市三陸町越喜来の泊地区に、東海大学の学生ボランティアが仮設公民館を建てた。この地区の公民館は津波で流出し、住民は小さな旧牛舎をその代わりに使っ

ていた。仮設公民館の完成によって、それまで外でおこなわれていた寄り合いを建物のなかでおこなうことができるようになったという。また、滋賀県立大学の学生ボランティアは、宮城県南三陸町歌津田の浦地区に、住民が寄り集う小屋とトイレを建設している。このような若者たちの活躍は、かつて地域青年団が自力で住民施設をつくっていた時代を思い起こさせる。

生きていくためには食料がなければならない。雨露をしのぐ家屋も必要だ。しかし、人が生きるために必要なものは、それだけではない。人の寄り集うところがなければならないのだ。そのことを被災地の活動が教えてくれる。

また、被災地から離れたところでも、人の寄り集うところが求められていたことを忘れてはならない。うんと小さな集まりから大規模な集会まで、人の寄り集うところが生まれた。よこはまユースが主催した「公開シンポジウム『震災と子ども・若者のこれから』」も、その一つに数えられるだろう。



震災公開シンポジウム「震災と子ども・若者のこれから」。幅広い世代が集まり、大学生からの報告や発言もあった。

生活知の教育を

第二に、日々の暮らしを拠りどころにする教育の必要である。

岩手県釜石市では、それまで小・中学校でおこなわれてきた防災教育によって、学校に居た児童生徒の全員が津波の被害を免れた。釜石市

の防災教育は、わたしの考えでは、学校モデルを超える教育だ。

片田敏孝によれば、その教育プログラムは、三段階に整理される。まず、津波の被害を想定したハザードマップを提示して学ぶが、「想定を信じるな」と伝える。次に、事前の決まりごとに構わず「その状況下で最善の避難行動を取ること」を伝える。最後に、みんな一緒ではなく、「率先避難者たれ」と伝える。このような三段階である。つまり、教師や大人の指示を待つのでなく、子どもがその場その場で自分の頭で判断することを基本にしているのである。

これに加えてもう一つ、わたしが注目したのは、授業の冒頭で「美しい海のある釜石が羨ましい」と伝えてから防災教育を始めると、片田が語っていることだ。津波をおそれて自分のまちを嫌いになっては防災教育の意味がない。子どもを嫌うことを思いやる方法に感心した。

この話にすぐ思い浮かんだのは、全国各地でおこなわれる、子どもを犯罪から守るための安全・安心教育が抱える問題だ。中途半端なやり方をすれば、犯罪地図づくりによって、子どもが自分たちのまちを嫌いになってしまうだろう。かたちだけになりがちな青少年育成活動も、学校教育と同じように反省しなければならない。

釜石市の防災教育は、日々の暮らしに依拠した生活知の教育の必要を教えてくれる。今後、防災教育が、過去の反省の上に立っておこなわれるのであれば、学校教育や青少年育成活動を捉え直すきっかけになるだろう。学校モデルの教育は、学校教育の場合も、青少年育成活動の場合も、正解の用意されていない問題には対応しにくい。その一方で、日々の暮らしには、正解の用意されない問題が多い。生活者は、そのせいで、学校モデルの教育とは別に、生活知（世間知）をはたらかせて、さまざまな問題と向き合っている。その方法を、学校教育や青少年育成活動のなかで生かす工夫が必要だ。

よこはまユース（当時の横浜ボランティア協会）のはたらきかけで始まった事業の報告書『この街でつながる、育ち合う 十日市場中学校地域交流事業報告書』（地域交流事業実行委員会 2012年）は、この課題を考えるための参考になるだろう。



横浜市立十日市場中学校地域交流事業。「夏ボラ」のオリエンテーションで、地域の活動団体から説明を聞く生徒たち。

地域社会のリーダーへの期待を

第三に、地域社会のリーダーへの期待である。

「社会が悪くなると、人が輝く」ということばがある。被災地で苦闘する首長の姿をみると、このことばが思い浮かぶ。

自治体の首長は、住民に目を向けなければ、住民の暮らしを守ることにはできない。上意下達の仕組みに身を委ねては、非常事態のなかで、住民の命さえ危うくなる。このことが震災によって明らかになった。

そうはいても、首長一人の力には限界がある。被災地で苦闘する首長の背後には、首長を支える役所職員や住民リーダーの姿がみえる。こう考えると、首長から住民リーダーまで、地域社会のリーダーに期待されるものは大きい。

もちろん問題は単純ではない。被災地の首長は、どのまちでも住民の厳しい批判にさらされている。厳しい状況のなかで、激しい議論がおこなわれるのは当たり前のことだろう。正解の

用意されていない問題を解くには、さまざまな位置にいる人々が話し合うしかない。超人的な人物を想定して、その人にお任せするという考え方は間違っているのだ。

大人だけではなく、十代二十代の若者のあいだにも、将来のまちのリーダーになろうと考えたり、すでに地域活動に加わったりする姿がある。都立高校の生徒たちが交流する岩手県大槌町の大槌青年応援隊（元・安渡青年協力隊）のように、避難所のボランティア活動をきっかけに、まちの復興の活動に参加する高校生たちがいる。被災地の若者たちは、多くの命が失われた不幸な出来事を、自分たちの将来を考えたり、地域活動に加わったりする貴重な機会として生かしているのである。その姿に学ぶべきものは多い。

子どもや若者のことを考えれば、大人の責任は重い。震災復興も、原発事故対策も、今、ここでの大人の対応が、今後の日本の社会に大きな影響を及ぼす。この時期に的確な対応をとらなければ、次世代に対して、長期間にわたって、より一層過酷な負担をかけることになる。

また、これに対応する大人は、震災によって新しい問題が生じたと考えるだけでなく、これまで長年にわたって先送りにしてきた数多くの問題があらわになった、と受け止めなければな

らない。じっさい、これまでみようとしてこなかった、さまざまな問題が、直接の被災地以外のところでも、あからさまになっている。若者のところへ目を向ければ、雇用状況の悪化、年金をはじめとする社会保障の不安など、これまでずっと先送りにしてきた問題が山積みになっているのではないか。

震災一年後の状況は、とても楽観できるようなものではない。地震、津波、原発事故による災害は、今なお続いている。被災地の復興と原発事故の先行きのめどが立っているとはいえない。そればかりか、新たな地震、津波、原発事故のおそれが指摘されている。いたずらに不安にかられることはないが、現実から目をそむけることは許されない。この社会が、“進歩”や“発展”や“成長”ということばでは捉えきれなくなったことを、勇気をもって認める必要があるのではないだろうか。

そんななかで、大人が、次世代に手渡すことのできるものは何なのか。子ども・若者を支援しようとする大人は、地域活動をとおしてこの問題を考え、子ども・若者支援を続けていかなければならない。大人は、子ども・若者とは別の意味で、重い荷物を背負うことになったのである。

法人事業報告・紹介記事

◆ 人材養成研修「青少年にかかわる大人の役割」

横浜市青少年育成センター 七澤 淳子

◆ 子どもたちの身近な場所で満天の星空を！～出張プラネタリウム事業～

公益財団法人よこはまユース事業課 雨森 勇一

人材養成研修「青少年にかかわる大人の役割」

横浜市青少年育成センター 七澤 淳子

"自己責任" や "プライバシー" "安全" という言葉や認識が一人歩きしてしまい、地域のみならずあらゆる関係性が希薄になってきていると感じる。近年、青少年の「居場所づくり」の必要性が叫ばれているものもこうした要因が大きいだろう。現在は意識的に作らないと、学校や家庭以外で青少年が大人と出会う機会は少なくなってきており、特に、明文化できる関係性ではない大人との関わりは難しくなっている。しかし、青少年期に多くの価値観や人生に触れることは、将来や生き方を自分自身で選ぶ力が養われることにつながっていくのである。

すなわち、たくさんの大人たちと出会うことは、青少年に必要なのだ。

こうした課題に対して、「日常的に」青少年と関わる機会が作られる、地域施設や活動のスタッフへの期待は大きい。自らの関わりはもちろん、地域への橋渡し役として青少年の育ちを支援する役割も期待される。本研修は、青少年に関する課題別・機能別の役割に対するスキルを学ぶ研修ではなく、「居場所づくり」という視点から『青少年にかかわる大人の役割』とは何かを包括的に考える研修と位置付けた。これは、特別な役割（例えば、就労支援機関の相談員など）がなくても誰もが青少年の育ちに関わる大人であるという認識を広げ、地域人材の裾野の拡大も目的としている。さらに、主となる参加者を施設等で現在働くスタッフとし、概念的な学びだけでなく、実践事例から「どのような考え方で、どのようなことをしていくか、そして自分はどうするか」についてテーマごとに学ぶ連続講座とした。

2ヶ月にわたる長期研修ながら、施設スタッフのみならず行政職員や教員・児童委員などさ

まざまな分野から定員を超える応募があり、多様なテーマによる包括的な研修への関心の高さが伺うことができた。

研修では、講師からの学びはもちろん、参加者同士の意見交換からの学びも大きかったことがアンケートから伺える。しかし、意見交換で明らかになったのは、組織や施設を代表してというより個人的に「何とかしたい」と思って参加した人が多いことである。目の前の青少年たちの力になりたいと思いつつ、組織としての対応に課題や限界を感じジレンマに陥っている。講義や意見交換を通じ、「考え方は間違っていない」と確認できたという声があがったのは良かったが、組織や施設に対し、役割と、それを実現できる大きな可能性や力があるということを行政とともに発信していく必要性を感じた。

<各回の主な内容>

- 第1回：導入講義 9月29日（木）
 講師：萩原 建次郎先生（駒澤大学）
 テーマ：「青少年にかかわる『大人』の役割
 ～青少年の「居場所づくり」から見えること～」
 【内容】
 ・導入講義：「青少年の居場所づくりから見えること」／参加者自己紹介：「受講動機と現在の関心事」
 ・オリエンテーション

* 講義キーワード

- ・本講座で使う「大人」の定義…不登校や就労支援等 "機能別" のかわりではなく、不特定多数の中高生にかかわるスタッフやボラン

- ティアなど、“専門家ではない大人”を指す。
- 機能主義化する生活空間—あいまいな空間は無駄、無駄なく効率的こそ大事⇒「あいまいな存在に寛容しなくなった」
- 青少年の居場所づくりにとって大切な視点⇒「中間領域」…他者・社会とつながる場—生き生きとした現実を生み出す。
- 声かけから会話へ。会話から対話になるときに、青少年自身の「本当の願い」に触れることがある。

＜参加者のふりかえり（アンケートから抜粋）＞

- 現在、施設や活動での関わりや、青少年を取り巻く環境や地域について「課題」と考えること
- ・年齢ごとに区切られた場所がほとんどということ。異年齢での交流がもっとあってほしい。
- ・やる気のある子、サポートが必要な子以外の中間にいるような子たちのことを考えてくれる居場所が不足しているのでは。
- ・自分も含め、地域の大人たちの「無関心」

●研修を終えて、感想や意見

- ・地区センターのような場が子どもたちのあいまいな場として活用されているのだと思いました。暖かい目で見守ってほしい。
- ・子どもたちとの関わり方の難しさにあけくれています。よくよく考えてみると、“排除”する心を持っていたことに気づきました。
- ・中・高生であった時を覚えていれば簡単なはずのことが難しいです。
- ・建物（器）だけ立派でもコーディネートする大人がいないとうまく機能していかないと思った。

■第2回：実践見学① 10月6日（火）

見学先「フリースペースみなみ」

（南区青少年の地域活動拠点）

【内容】青少年の居場所づくりの実践と、地域での青少年支援について

＊研修キーワード

- ・青少年地域活動拠点の役割—「異質な他者に出会う、公的な場所」…私的なつながりだけではない。異質さを保持する。
- ・つねに「必要なことか？」検証と評価することが大切。
- ・（施設／事業を）私物化しないように、緊張感を持って運営している。→公共施設を運営していく上で地域からどう見られているかを意識する必要がある。

＜参加者のふりかえり（ふりかえりレポートから抜粋）＞

- ・「異質な他者にはいかに出会えるか」という言葉が印象に残った。いろいろな青少年の居場所がある中で、その場所・場所に定義が必要だということを深く認識した。
- ・明確にできることは徹底することで、具体的な方向性が見えると考えられた。
- ・絆づくりや地域とのかかわりは、今後、高齢化が進んでいく世の中でぜひ実行していきたいと思った。



「フリースペースみなみ」実践見学

■第3回：テーマ研修① 10月12日(水)

話題提供：青少年交流センター利用の青少年8人

テーマ：「青少年にとって"スタッフ"ってどんな大人？～青少年に聞いてみよう！～」

【内容】・青少年への質問・グループディスカッション

* 研修キーワード

●あなたにとっての居場所って？（青少年が回答）

- ・地元の友だちという時が一番ホッとして、居場所だなぁと感じる。遠慮しない関係で、裏切られないような気がするし、自分も裏切らないだろう。
- ・（浪人生なので）どこにも所属していない不安感がある。だから今は交流センターが、毎日人と会えて、スタッフの人と話したりできる居場所になっているかも。

<参加者のふりかえり(アンケートから抜粋)>

- 地域の大人として(または現在の活動で)青少年たちに何を伝えていきたいと考えましたか？
- ・一人一人、みな大切な人であり、存在を気にしているよということ。
- ・「大人はいつでも話を聞く準備ができています」と伝え続けたいと思います。
- 青少年の"居場所づくり"で「地域の大人ができること」
- ・厳しい大人、優しい大人、それぞれが役割分担をして青少年と関わっていけたらと思う。そして大人たちがお互いを尊重していきることができたらと思った。
- ・地域で小学生の頃から集う場。成長することで地域から離れるようになって、小さい頃の友・地元を大切に思う・帰れる場はステキだと思う。そういう場となってほしい。

■第4回：テーマ研修② 10月19日(水)

講師：中村喜久栄さん(元地区センター館長)

テーマ：「排除から受入れへ

～地域施設における青少年の居場所づくり～」

【内容】講義（地区センターでの青少年に対する取り組み）

* 研修キーワード<抜粋>

- ・地域施設の役割とは何だ、といつも問い直すこと。青少年も含めて「地域」である。青少年の問題は地域の問題。
- ・青少年は「誰かにかまってもらえる愛情と、誰にも管理されない自分たちの場がほしい」だけ。
- ・長年、課題を抱えながらも取り組んできたこと（青少年の受け入れ）が、行政が事業として取り上げてくれたことにより一気に広がりを持てた。

<参加者のふりかえり(アンケートから抜粋)>

- ・同じ地域にいるという実感がもてる"目"を青少年に、そして地域からの青少年に対する存在認識の実感を与えることが地域施設の役割だと感じた。
- ・（良くも悪くも）仕組みをつくることが大事だと思いました。行政のチカラが役に立つんだと感じた。
- ・青少年に対して「ダメなことをするだろう」「叱らなければならない存在」という大人の前提があるのが課題。
- ・指定管理制度が導入され、以前にも増して「利用者＝お客様」「サービスの提供者と受益者」という認識が施設・利用者側（大人に限る）に強くなった気がする。使用料を払わない、きちんと使わない青少年たちは「サービスを提供するに値する利用者」に入らないという認識が施設側でも蔓延している。青少年に向き合う前に、スタッフ間の認識の違いで壁にぶつかることがある。

■第5回：実践見学② 10月25日(火)

見学先：「ことぶき青少年広場」

(中区青少年地域活動拠点)

【内容】実践見学・説明／質疑応答／意見交換

* 研修キーワード (説明から抜粋)

- ・広場に集まる子どもたちもさまざま。外国につながる子、経済的な困難を抱える子、何も課題がないように見える子。
- ・青少年にとっての「優しい大人」を演じるのをやめたら、楽に向き合える。「やってあげている」と思ったとたん、子どもたちとの関係性がゆがんでしまう。
- ・「異文化」としての子どもの文化を受け入れること。"当たり前"を揺さぶられる。価値観を突きつけられる。

<参加者のふりかえり(ふりかえりレポートから抜粋)>

- ・行政でまかないきれない現実な対応をしていることがとても嬉しく思った。
- ・OBOGたちが、担い手となっていくことは理想的。そのような機会ができるように場の継続も重要であると思った。
- ・自分自身仕事として何ができるのか？一人として何ができるのか？を考えて有意義な時間だった。
- ・子どもが伸び伸びとしている様子が印象的。どこか昔懐かしい感じがし、自分が子どもだった頃を思い出した。環境はさまざまであっても、子どもたちは自己を肯定できる。相手に認められたい・受け入れて欲しいという欲はいつまでも変わらないと思う。

■第6回：テーマ研修③ 11月2日(水)

講師：有吉 晶子さん (臨床心理士)

テーマ：「青少年の行動心理

～「なぜこんなことをするの？」を理解する～

* 研修キーワード (抜粋)

- ・「言いたくないけど、分かってほしい」という矛盾 → ゆらぎを受け止めることの大切さ
- ・アイデンティティの確立の時期 → 人はひとりでは自分を知ることができない → "かかわり"の重要性。
- ・「子どもだから」「青少年だから」というくくりで観るのではなく、一人ひとり違うという前提を忘れない。

<参加者のふりかえり (アンケートから抜粋)>

- ・当たり前なのですが、一人ひとり皆違うということを理解しました。
- ・「ゆらぎ」を受け止められる社会という点が勉強になった。支援側と支援される側の世代間のギャップがあると、「指導する」という形になりがちですが、「受け止める」という点があらためて大事だと思った。
- ・その子が本来持っている力をできるだけ引きのばし、見守る姿勢についてもっと考え、見つけていきたいと思いました。



■第7回：テーマ研修④ 11月9日(水)

講師：林田 育美さん（つづきMYプラザ館長）

テーマ：「地域の力と子どもたちを結びつける
～子どもが育つ・大人も育つ～」

【内容】講義／質疑応答／意見交換

* 研修キーワード<抜粋>

- ・「大人も育つ」という視点は、必ず持つていなければいけないこと。私たち大人も育っていかねばいけない。
- ・「自分たちだけでできたとしても、やらない」→ひとつでも巻き込める人たちが多いうほうが良い。そのための努力はいとわない。
- ・大人だって、ありのままを受け入れてほしい。自分のことをわかってほしいと思っている。

<参加者のふりかえり(アンケートから抜粋)>

- ・「地域で育てる」「地域に育つ」。青少年が安心して生活する上で重要なこと。
- ・たくさんの方が色々な角度で見て関わることで青少年をより良い方向へ導ける。多くの人の支えがあるということ、つながりがあるという安心感を持ってもらえる。
- ・中高生に対する大人の意識を変えること、自分たちが子育てをしていた頃を思い出してもらおうことが地域で子どもを育てることにつながる。
- ・青少年の力を信じていない大人が多い。地域で子どもたちを見守っていこう、という雰囲気なかなか難しく、子どものうるさい、汚ない、危ないをなかなか受け止めてもらえないのが課題。

●本日の研修で学んだこと、感想・意見など。

- ・意識不足に改めて気付かされた。施設の現状を認識し、今後の展開を考え直すための学びをもらった。考え方、投げ方次第で施設が何倍にも成長する可能性があると感じた。

■第8回：ふりかえり講義 11月24日(水)

講師：萩原 建次郎先生(駒澤大学)

テーマ：「青少年に関わる大人の役割」を考える

【内容】キーワードから講義をふりかえる／グループワーク「青少年に関わる大人の役割」とは何か

* 実践見学・テーマ研修から浮かび上がった5つの視点

- ①現代社会をどうとらえるか
- ②青少年をどう理解するのか(どう理解し得るのか)
- ③青少年の育ち・大人の育ち・社会の育ちを考える
- ④青少年と関わる大人の役割とは何か(一人の大人として、施設職員として、行政職員として等)
- ⑤大人の居場所づくり



<グループワークで出た「青少年と関わる大人の役割とは」>

- ・子どもや若者のコミュニティを壊しているのは大人側かもしれない。何でも合理的になりすぎ、一見 "わずらわしい" ような支えあいこそが青少年とのかかわりの中で大切。
- ・「大人-子ども」ではなく、人間同士の関わりとして捉えることが大切。
- ・絶えず粘り強く接していく。見守っているよ、という言葉だけでなく態度でも表していきたい。

- ・自分自身にゆとりや "ため" ができた時に子どもを受け入れることができると思った。
- ・「大人と子どもが関わる居場所」には、必ず何らかの意味があるのではないか。関わりの中で自己肯定感を育むことが成長には必要。青少年を認めていきたい。



**【研修全体について－参加者ふりかえり
(アンケートから抜粋)】**

■受講前と受講後で、「青少年に対する考え方」「青少年にかかわる大人の役割について」変化はあったか？

- ・子どもが悩むように、大人も悩んでいる。こんなにも利用者、子どもたちのことを考えている人がいるということを知ることができて良かった。
- ・かたちとしていなかったことが理解が変わった。知識としたことを現場で活かせればと思う。
- ・青少年のことを理解しなければいけないという意識が強かったのですが、まずは大人自身の意識を変えなければいけないと感じた。
- ・わかっていないのは自分だけかと思っていたが、同じような悩みを持つ方が多くいること

を知り、安心すると共に自分ももっと頑張らねばと思った。

- ・青少年を「支援」ではなく「応援」していこうと思った。

■これからの「青少年と関わる大人の役割」について教えてください。

○自分がすぐにできること・取り組みたいこと

- ・自立という言葉ばかり先にでて行動しがちだったが、まずは自分の意識を変えることが大事だと思った。

- ・「関心を寄せている空気、そこに居るだけで関係は始まっている」それでいいのだと思い安心した。

○社会全体で取り組みが必要だと思ったこと

- ・施設をつくる時、方針をはっきりする一方で、常に現場を見ること(行政側の視点として)。
- ・世の中の変化に細かく影響をうける子どもたちを受け止められるように、自身も敏感にアンテナを立てて対応していきたい。
- ・効果がすぐに見えない取り組みについての必要性を、社会全体が認識する必要があると感じた。
- ・子どもに対する否定的態度や偏見を減らし、大人と子どもがお互いに適切な関係を持てる居場所の環境を整えること。

子どもたちの身近な場所で満天の星空を！

～出張プラネタリウム事業～

東日本大震災による影響で、東京電力創業以来はじめて、地区ごとに強制的に交代で電気が止められる計画停電（輪番停電）が実施されました。

電気が止まった横浜の街は、真っ暗となり、とても不便な思いをされたと思います。

しかし、電気が止まった横浜の街の星空がいつもとちょっと違うことに気が付きませんでしたか？

本当は横浜の夜空にもたくさんの星があります。横浜で星が見えにくいのは、街の灯りなどが暗い星の光を見えなくしてしまっているからです。

電気が止まったことで、いつもは夜空を照らしている街灯や住宅の灯りがなくなりました。その結果、いつもよりたくさんの星を見ることができるようになったのです。

不謹慎な言い方になりますが、停電のおかげで星が見やすい環境ができたのです。

【きっかけ】

計画停電が終了して横浜の街もイルミネーションが復活し、いつもの活気が戻って来ました。

一方で、残念ながら私どもは昨年度まで指定管理者であった「横浜こども科学館」を引き続き運営することができなくなってしまい、設備の1つであるプラネタリウムも使用できなくなってしまいました。

しかし、私どもが自然科学体験を通して青少年の健全育成を行っていくことに変わりありません。

科学館という場所は失ってしまいましたが、それならばこちらから青少年の居場所に出向いて満天の星空「プラネタリウム」を提供しよう

公益財団法人よこはまユース事業課 雨森 勇一

ということになりました。出張プラネタリウム事業のはじまりです。

【準備】

まずは、星空を投影する方法の検討を行いました。

電車移動で持ち運びができることと、極力予算がかからないという視点で考え、パソコンとプロジェクターを使用したデジタルプラネタリウムを構築することにしました。

パソコンで動作させるプラネタリウムソフトウェアは、海外製のフリーソフトウェアを使用し、電車ではドームを持ち運びできないので、壁面に投影することにしました。

ソフトウェアをいろいろカスタマイズし、使い勝手を良くする一方で、すべての機材が入る大きなリュックサックを購入して、ハードウェアの準備ができました。

【実施に向けて】

次に、実施場所の検討を行いました。

需要調査などを兼ねて、私どもで運営している「放課後キッズクラブ」でテスト的に投影することを考えました。

「放課後キッズクラブ」はそれぞれ特色ある独自のプログラムを提供しています。そこで、主任指導員と指導員が揃っている会議の中で、プラネタリウムのデモンストレーションを行い、「放課後キッズクラブ」での実施を提案しました。

その結果、約半数の9つのキッズクラブから依頼がありました。

会場となる「放課後キッズクラブ」には3つ

のお願いをしてあります。

- 1 真っ暗にできる場所を用意
- 2 スクリーン替わりになる白い壁（模造紙でも可）を用意
- 3 コンセントを用意

通常キッズクラブには暗幕がありませんので、学校から視聴覚室をお借りしたり、自宅の遮光カーテンを持ち寄ったり、黒い紙を窓に貼ったりして、暗い部屋を作ってくれました。

また、模造紙やシートを使ってスクリーンを製作してくれました。

会場ができあがれば、パソコンとプロジェクターの設置は30分程度で済みます。

スクリーンの大きさにもよりますが、1回の投影につき30人程度が見やすいので、希望者が多い場合は、複数回投影しました。

やはりというべきか、七夕前後の依頼が数多く寄せられましたが、自宅に帰ってから実際の空で星を探せるように当日の夜の星空を中心にお話しました。

星空はじっとしていません。常に動いています。月の形も変わり、見える惑星や星座もどんどん変わっていきます。

【投影の流れ】

部屋の電気を消すと、そこには横浜の港から見た風景が映し出されます。子どもたちはまずここで大喜びしてくれます。ランドマークタワーなどのよく知っている建物と太陽の位置を確認した後、時間を早送りします。

一番星が見えるようになると、子どもたちは大騒ぎです。子どもたちが起きている20時から21時で時間を止めます。

はじめに、方角を教えてくれる「北極星」の見つけ方です。春から夏にかけては「北斗七星」から、秋から冬にかけてはカシオペア座から探

す方法を伝えます。北斗七星は見つけやすかったようですが、カシオペア座は難しかったようです。

方角を確認して、春は「春の大曲線」、夏は「夏の大三角」、秋は「ペガサスの大四辺形」、冬は「冬の大三角」の見つけ方をお話します。どこのキッズクラブにも天文好きが2～3人いて、私がお話する前に解説してくれます。

季節ごとに見られる星座は変わってきますので、春は「おおぐま座」に関する神話、夏は「さそり座」に関する神話、秋は「カシオペア座」等に関する神話、冬は「オリオン座」に関する神話をお話しましたが、子どもたちがこんなにギリシャ神話好きだとは思いませんでした。次から次へといろいろな星座の神話を求められることもありました。

デジタルプラネタリウムの良いところは、月や惑星などを望遠鏡で見たように拡大してみることができることです。

当日に見られる月や惑星（木星や土星）を拡大すると子どもたちは大興奮です。特に土星は人気でした。

七夕の時は選択制の「七夕クイズ」をやってみました。これが思いのほか好評だったようで、同じキッズクラブに再度お呼ばれした際に、「今日は、クイズはないの？」と残念がられました。

これまで、あまり星が見えない横浜の星空でお話してきましたが、街の灯りなどがなくなったらどのくらいの星が見えるのでしょうか？

みんなのカウントダウンにあわせて、満天の星空にしてみます。「おお？」という声や「気持ち悪い」という感想などが聞こえます。人間が環境を変えたことの弊害ですが、街灯は足元だけを照らしてくれればいいので、やり方を変えれば環境はある程度取り戻すことができます。こんな話にも子どもたちは何かを感じてくれたようです。

つづいて88星座すべてを投影して、自分の誕生日の星座を探してもらいました。

本当は、季節によって見られる星座と見られない星座があるのですが、そこはプラネタリウムです。1年分の星座を出すことによって、みんなに喜んでもらいました。

最後に時間を進めて日の出を迎えて終了です。ここで感じたのは日の出を見たことがないという子どもたちが多いということでした。改めて自然体験が不足しているのだと思いました。

【終わりに】

出張プラネタリウムは喜んで受け入れられ、同じキッズクラブからの再演の依頼や、地区センターや小学校四年生の授業にも呼んでいただけるようになりました。

今年度はテスト的にほぼ無償で実施しましたが、需要があるという収穫と同時に、費用面で課題が残りました。しかし、子どもたちに喜んでもらえ、環境教育も担える本事業をどうにか継続できないか検討しています。その1つとして以下のようなアプローチがあります。

自然体験の観点から考えると、本来プラネタリウムで星の見つけ方を学んで、それを実際の星空で実践することが望ましいわけです。

私どもは横浜市野島青少年研修センターという宿泊施設を運営していますので、そこでプラ



ネタリウムと天体観測をセットにしたプログラムを提供できないかと考えています。

この1年間を振り返ると、質問をしてくれた子どもたちのキラキラした目が印象的でした。様々な問題がありますが、本事業の火を消さずに継続していければと考えています。

青少年育成活動・支援活動 研究報告・事例集

YOKOHAMA EYE'S 2011

平成24年3月発行

■編集・発行

公益財団法人 よこはまユース

〒231-8454 横浜市中区住吉町4-42-1 関内ホール地下1階

TEL : 045-662-3716 FAX : 045-664-6254

MAIL : soumu@yokohama-youth.jp

URL : <http://www.yokohama-youth.jp/>

